

大きな挫折^{ざせつ}を大きな成功に

函南町立函南中学校 1 年（創作時） 荒井侑希

『海の子山の子』第169号より

私は、小学校低学年のころから、そろばんをやっています。そろばんは、私の母もやっていましたもので、とても親しみ深いものでした。そんなそろばんは、私にとって、すごく大きな存在^{そんざい}です。

私は、一番最初の「十級」から、「三級」まで、試験で一度も落ちたことはありませんでした。そんな私が、初めて試験に落ちたのは、小学校六年生のときでした。「二級」というところまでたどりついたのはよかったのですが、そこには大きな壁^{かべ}がありました。「二級」の壁は

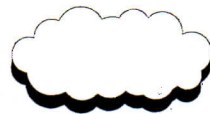
そこにあるのに、どうしても越えられないのです。今までは、すぐに越えられたのに、すぐ達成感が味わえたのに。すぐに物事から逃げてしまつ私ですが、「そろばん」という分野からは目をそむけたくない、そう思いました。二度目の試験。さすがに受かるだろう、そう思いました。ですが、私の思いとは全く異なる、「不合格^{ふごうかく}」という文字が、私の期待を一瞬で裏切りました。

それから一年。私は中学生になりました。新しい仲間と出会ったし、楽しい発見の日々が

試験がスタートしてから終わるまでの間は、忘れてしまつほど真剣にやりました。練習では、五回中三回合格点に到達していたのだから大丈夫、そつ前向きに考えました。試験が終わって

そして金曜日。待ちに待った、結果当日。緊張と不安と期待、混ざりに混ざった感情が、結果の書いてある紙をめくりました。そこにあつた文字は……「不合格」。合格点は、二百四十点。そこに記されていた点数は、二百三十五点。たった五点。みとり算（たし算とひき算が混ざった計算）は一問十点。かけ算、わり算はそれぞれ一問五点。つまり、ただあと一問、どれか





ひとつでも合っていれば良かったのです。何度見返しても変わらない点数と、「不合格」と書かれたその紙。私の目からは、くやし涙があふれました。それと同時に、背中を押してくれた母、教えて下さった先生、そして何よりも、応援してくれた家族や友人に、申し訳ない気持ちで仕方なくなりました。くやし、くやし、その言葉が何度も頭に浮かびました。まだこんなものじゃないけれど、「挫折」というものを味わった気がするのです。それを味わった私は、さすがに三度め、もうそろ

ばんはやめよう、と思いました。その前から、やめる話は家でもでていました。部活や、勉強面についての問題が関係してくるからです。だから、このタイミングでやめることは、別におかしくはないと、そう思いました。…今、私はそろばんを続けています。あのとき、小さな「挫折」を味わった私は、そろばんをやめようと思いました。でも、同時に、あの二度めの試験のとき、「そろばんという分野からは目をそむけたくない」そう思った自分が、よみがえってきたのです。

今回の三度めの試験は、私を変えてくれたできごとだと思っています。何事からもすぐに逃げてしまう私が、唯一あきらめなかったもの。それが、この「そろばん」なのです。まだ、二級は受かっていません。でも、きっと「挫折」を「成功」に変えるチャンスは、私の前に、現れると信じています。そのときを待ちかまえて、これからもたくさんの壁を越えられるように、日々努力したいと思います。

